

びを体験していったことであろうと思われる。友だちというものはざわつてもいじめるものでないということが次第にわかってくるように思われた。

こうしてE子にとっては生まれてはじめての波瀾万丈の一学期が過ぎていった。家庭でもわかって下さったらしく夏休みは積極的に友だちあそびをするようにされていたのではないかと思われた。二学期になってからは「もう早くかえらなくてもいい」と言い出して泣き顔が見えなくなった。運動会や遊戯会などで演ずる動きの流れにもとにかくのり、どうやら集団生活の中におさまることが出来るようになった。二学期の間は友だちあそびがほとんどなく何となく私のそばにいて、ひとり言のような話しかけをしながらひとり遊びをしていた。何か新しい経験をした時に大いにほめてはげますと、とても嬉しそうな顔をするのである。寒くなつてオーバーの時期がきた。E子は仕事をとてもよくするとところから、オーバーの一番上のボタンかけの出来ない友だちに「F子ちゃんは上手だから先生の代

りにして上げてちょうだい」と私の代りにさせるようにした。毎日の帰りの支度の時に、そのうちにボタンがかけられず困っている子、袖が通らずにいる子を見つけて「……してあげようか……？」ともじもじ自分から言いだすようになった。

本年度は担任がかわりE子のすべてを知ることが出来ないが、園庭でここに友だちと遊んでいる姿を見ては安心するのである。
(東京・鷺宮学園幼稚園)

E 過依存の子ども

ここに掲げる子どもは過度に依存的な子どもの場合である。最初の例では幼稚園でも、おとなに親しませる段階から、徐々に指導して、かなりの期間の後に、きっぱりと母親から離して成功している。二番目の例では、おとなに対する依存性を、友だちの方にすりかえている。第三の例では、保育者に親しませることに重点をおいている。

過保護のために、過度に依存的になっている子どもの指導の場合には、わがままを通させないきっぱりとした態度も必要である。しかし、保育者に依存してくるときに、むげに斥けていると信頼関係ができない。依存的な子どもは、必ずしも過保護だけが原因とは限らないから、依存的だから、厳格な態度でのぞむという式の指導はあやまりをおかすことがある。その子どもなりにうけいれてやるのがまず必要である。保育者との安定した信頼関係ができたならば、その次の段階にむりなくすすむことができる。

A 児の成長

大崎 ムツ子

「誰でもよく泳ぐような環境に生活する子どもは、泳ぐ設備のない環境に生活している子どもよりもはやい時期に水泳を習得するであろう。また二つの国語を語る環境に

育つ子どもは、一つの国語を語る環境に育つ子どもと同じように、二つの国語に習熟することができぬ。」—ジャーシールド—

Aは、昨年四月に年少組へ入園した中流家庭の長男で、一つ違いの妹と二人兄妹である。家庭環境は、両親と妹と女中の五人で、住いを別にして祖母がいる。入園前には、家の近所には年の近い友だちがいないというところから、しじゅう家の中か庭で家の者誰かが相手となってAを遊ばせていたらしい。つまり、Aが対等の立場で遊ぶ相手ではなく、遊ばせてもらっていたようである。したがってAの言い分、思いつきは、いつもかなえられて思うようにすべてがなされていたように見られる。また祖母がたまに訪れると、ただやたらに甘やかし、妹と何かわけあうときも「お兄ちゃんに……」「お兄ちゃんだから……」というように、いつもAは割がよかったようである。そういう生活が続けば、Aがわがままになるのも致し方ないことだろう。幼稚園の生活にもその様子がうかがわれた。

入園後しばらくは登園をいやがり、どう

して幼稚園がいやなの」と尋ねると「Cちゃんが悪意をするから」「ママがおうちにいてというから……」などと別にそうでもないことを何とか理由づけていいのがれをする。また登園しても、母親から離れず、いつまでもそばにくつききりで他の子どものように遊ぼうとしない。友だちと遊ぶということがどんなにおもしろく楽しいかということをも、いろいろと誘いかけ遊びの中へひき入れようとしたが、なかなか思うようにはいかなかった。

そこで、今まで家庭でおとなが相手となつて過ごしていたのであるから幼稚園でもまず私と親しくなるようにすることが第一歩だと考えた。友だちとなじむのはその次として、母親も保育室に入り、Aと母親と私、という関係で幼稚園の生活を続けたわけである。Aは知能の面ではかえって他の子どもよりもすぐれており、理解力もあつて仕事もてきぱきと片づけていくが、いったん母親の姿が見えなくなるとさっきの理解力もどこへやら、ききわけもつかずいきおい大きな声で「ママ、ママ」と泣き続

けるのみである。二、三日幼稚園をお休みさせて様子をみようかとも思い、あまりに泣いた一日だけは、「明日はきつと来るのよ」と約束をして帰したが、かえって幼稚園を忘れさせてもいけないと思い、やはり何とか登園させる方法をとった。そんなAであるから、帰宅のときには必ず明日登園しなくてはならないような用件、例えば、「明日はお当番さんをしてちょうだいね」「明日ママにお返事をきててね」というようにして何とか登園させる。また夕方電話をかけて、幼稚園の楽しかったことを話したり、「明日は粘土をしてお遊びをしますから早くいらっしやいね」などと誘いかけて明日を期待させるように試みた。そして一方母親の方は「今日はお部屋の入口で見えていますよ」「今日は玄関まで」と徐々にAから遠ざかるようにした。

そのうちに、朝のうちは少々ぐずつても私がいっしょのとき誰はとでもはしゃいで遊ぶようになったが、一つの遊びが五分と続かずすぐにあきてしまい、すべりだいか

らブランコ、砂場、平均木と次々に遊びをかえていく。始めはAが遊びの中に入れるようにという心づかいからAのすきなことをさせておいたので、これはよけいにAをわがままにしてみましたようで、Aがリーダーになっていないとすぐにやめたりぐずったり始める。幸いAはききわけの悪い方ではないので、「AちゃんがおにになりたいようにBちゃんもCちゃんもおにになりたいのだから、皆で順番にしましょうね。」と話す素直にうなずき納得したようである。

保育室では発表も非常に活発で、「泣くのは赤ちゃんなの。皆と仲よく遊ぶのがいい子なんだよ」とよく理解し、自分でもいっている。だんだんと私もAのみを重視しないで、全体のひとりとして指導していくようにした。

夏休みには、両親といっしょに海へいって元気にすごし、早く幼稚園が始まらないかと楽しみにしているという葉がきを受けとって、私もホッとした。

やがて、十月になると、大学生の実習時間が多くなって週に三日間となった。Aは

おとなが相手をしてくれる日が多いので、大喜びで、それがまたかえってわがままを起こさせ、おとなに遊ばせてもらえない日は、朝ぐずるようになってしまった。母親のいうことも素直にきかず、強情をはったり口答えをしたり、あるいは妹を泣かせたり、何かと反抗をするようになった。ある日、玄関でまた始めているところへ私が迎えにいき、今日は思いきって離してしまおうと考えて、泣きさわいだが母親に帰っていただきたい。結果は思いのほかよかつたように思われた。始めは泣きながら「ママ、ママ」と門の方を見て母親の姿をさがし、

むごいようにも思ったのであるが、五分もするとすっきり泣きやんでケロリとして絵をかき始め、友だちともニコニコしながらふざけている。私はAにはこの方法の方がさっぱりとしてよいのかもしれないと始めて気がついたのであった。

それから四か月、Aが登園後ぐずることはない。

もう、友だちともどんどん遊ぶ。Aのかく絵は、妙な型にとらわれて、だいたんに

筆が動いている。歌もはつきりと大きな口をあけてうたい、ニコニコしながら話しているのを見ると、いったいこれが「ママ、ママ」と泣き続けた子どもかしらと思うほどである。

(東京・感応幼稚園)

内気な子どもの指導

藤田よし子

入園後二か月、新しい子どもたちもや々と園の生活に馴れ、遊びも活発になる。

いつまでも集団生活になじめず、友だちと遊べない子どもは、入園まで家庭でおとなを相手に遊び、同年令の子どもと遊ぶ機会が無かったものに多い。近所の子どもと遊ばせると悪いことを覚える。外で遊ばせると危険だ、この子は身体が弱くて戸外遊びを好まないなどと幼児の欲求を無視して友だちとの遊びを禁じ、祖父母や母親が遊び相手になっていたものである。おとなばかりの環境で甘やかされて育った為、園での無口な意気地のない態度にひきかえ、家